風俗文選通釋

五 六

賦

へ 5
4218
3

風俗文選通釋　賊　五之六

門 へ 刹 5
號 4218
巻 3

此風俗文選通釈廿四巻ハ
予于移築地邸東勢州書留
ところ西侶会蔵四十弐冊
安政午四季今萩田生文

風俗文選通釈巻之五

賦類

芳野賦　　丈草

和州吉野郡東ハ勢州飯高郡ニ接シ紀州牟婁郡の界ニ至リ
西南ハ紀州牟婁日高有田伊都の界ニ至リ北ハ宇智高市十
市宇陀の四郡の界ニ及ヘ南方ハ山巒重々として封境伊勢紀
まて続く広大也　柳吉野山ハ本郡七ヶ高山の内其土治ニ至
よりて今の所嶽と称し又金峯山国軸山と云　聖武天皇の
朝良弁僧正勅使を奉て当山の金銀掘んとせしに蔵王権現
ゆるし玉はすと云　凡南北ニ深遠ニして里程ハ東ハ西
三里余り但一の坂より十五町　丈六堂ハ二丁　桐谷より二丁
蔵王堂より町　勝手明神　宮ア　吉野水分十三町　子守明神

二十町奥の院一里西河村一里宮瀧十五町桜木宮と申すの
里程有多國命ニ云ふと吉野川の上ハ大臺原と名つく
高嶺あつて人倫を通せす東より西へ流れ吉野山の麓ニ
至り南東流るゝ末ハ紀州紀の川と申なり名所記ニ云
吉野山ハ瀧山桜樹多して無ヲみハ精霊の棲のみし遊人
異客出て桜を賞し其名中華（モロコシ）ニ至ル天下の名勝とす
此勝ハ吉野山の至る所作りなし其地ニ桜殊ニ多く依てなり
精しく辨すへからす

よし野の吉野とハ皇居の地なり是之
和漢三才圖會ニ云吉野皇居神武天皇征伐長髄彦時
之行宮是乎万葉集ニ神代より吉野の宮のと詠ぜし
百人一首拾遺抄ニ日本紀ニ云吉野ハ天武天皇の古くからの皇居

詠し哥ハ古今より出ぬ　紀友則
み吉野の山の白雪つもるらし古里寒くなりまさるなり
御吉野又ハみよしのと云秋の瀧見ニ桜ニ上市中市下市とて
所々ありて三吉野とハ上之市を說著候様ニよし野云
其名十八里ニ至る大台十八ヶ所まて吉水院ハ後醍醐帝の皇居
所は十八瀧の至るより山伏ハ吉野より大峰へ入りてと山家
修して又吉野郷の院を所々といふなり
山川里嶺嶽高根尾上山の井花園似所とも入て二十一代の
哥数三百七十余首拾遺集の集物語所謂細縁のそひ

万葉集
み吉野の岩根の花さけくらし今も吉野高根の

古今集　友則

みよし野ハ山へにさける桜花雪かとのみそあやまたれける

貫之

よしの川岸の山吹ふく風にそこの影さへうつろひにけり

是則

朝ぼらけ有明の月と見るまでによしのゝ里にふれる白雪

續後撰集　藤原清家

吉野山いはとの川の岸の藤かゝりて又さく花ぞ咲ける

新古今集　頼政

今宵たれすゞ吹風を身にしめてよしのゝ嶽の月をみるらん

新勅撰集　藤原基俊

みよし野の山井のつらゝむすふとや花のしたひもとけてゆくらん

新後撰集　後京極良経

ふるさとの山かけの花ハ雪とちりてみよし野ゝ嶺の嵐ぞさそふる

玉葉集　入道太政大臣

みよし野の嶺の花園風ふけハ梢にかはる春の夜の月

此外新勅撰集にみよし野の花續古今集に瀧上とよみ

よし野も詠し侍り　吉野にハ名所ありて二十一代の集に

数しれ二千餘首の歌あるへし

細川幽斎の歌に

よし野山花さくころの朝な朝な心にかゝる峯の白雲

貞室老人の吉野にまうてゝ何とか詠けんや

是ハこれハとはかり花のよし野山　貞室

されハよし野の吉野といふ名ハいにしへより秀句の絶すよし野の

古今集たのしみまちわひきと

みよしのの吉野の山よりも出る月は花かとぞ見る我もまた
吉野川花の名におふは慈鎮和尚の御詠なる歌の中に揃へ
清巌茶話云慈鎮和尚のうたに
よしの川花の名にして清き水を霧の流る花風さそふに
花の名にしたといへる名にあらんときく
川は色の渕より流れて紀の和歌山にて在山は大峯よりつゞきて
那智をも離れつゝ流れ
名所図会云色の渕吉野郡の巴嶽より出て吉野川の水上
にて人の通ふ所にはあらず篠萩なと高く茂り
茂みつゝ生茂りたる所にて浅深かりしもの也甚中
にて色の渕にふかく流れてひらけは其所の名荻つゝ
て川の名をさゝねし此の所は熊野川の水源にて一所

とけは伊勢の宮川の源にて東へ流れ吉野川の名
からましとも知るなり
吉野川名所にて候所は篠の下萩の下の露
大和の山やいまゝでみつる所より熊野川の宮川
此所には西行法師云又此所は出羽の吉野川も
吉野より下は河の名を流し東は紀の川又紀州和歌の
浦へ出る大和巡覧記曰大峯東に色の渕とて深き淵
吉野川熊野川伊勢の宮川此三河の水上というは
虚説にて信すべからず大峯東山は熊野の別名
故に名所図会云羅列府志曰自熊野入吉野郡大峰出
出吉野是謂順峯入自吉野山入大峯出熊野是称逆
峯入其山深き名所也川

奈良の風情あり金峯山集大塔宮行宮大峯にかく
ものゝふに茲ぞ之へ此橋茲より和せ出る人あり
蔵王堂ハ二王とろふ安置し一類ハ八郷とかや
名所図会云丈六山一の鳥居ハ蔵王堂南にあり四里あけかり
氏のあたり並木の桜あり六田より吉野まで三十六町金峯山
あし蔵王権現御丈二丈六尺人経土たる事観世音代
二丈四尺人太勢勒御丈二丈六尺人役行者の遺像安置
す是當山の開基なり菅笠日記云蔵王堂に役行者
そう所かけさせて又是れハ里し本尊ハ像のいまる
此都して此ゝ御足さらけていみしう巡りき拝して上る
つる二月とら判ずる此間し出雲せてけしあ人遠き伝言
南面なり東へ横十八間行て拝礼して古くある

前に桜の門あり桜とふかりや西へ行の路
かしわれえる實城あり和漢三才図会云山上嶽今
山の頂也又本堂蔵王権現役優婆塞安置せり是を云
安置せしとかや
上市より八幡見て下市に到りて六田よりの妹背山
画して高殿の城を見ゐて鮮の桜日本の花
菅笠日記云多武峯より上市へ出る吉野川に滝のかう
つる流れ井上けて出るその岸を船しらて渡る
いと粧に浩いさき舟の如ふその岸ハ八幡見て黒えて岡
深の流れかし西をあきて丹治に不行吉野の山に入るや
深く入るまてゆきて杉村の中を見あけの向の花を中の世ぞ
けりとうへて桜の花を見このの中の向ひて此とも果

さて又六田の方より出るとも則今以て華厳院の此邸道より
坂路より也のほりて見わたせは誠に雨に似て一目
千本といひて大方みな此の桜を植たれは
名所図会云吉野山は六田より入る也吉野へ
ゆく人は必す此所より入るへし飯貝の方よりも吉野の町に出
それは是まての道也是より上は桜の実生の多く
移植てゆきての人ことことく見る吉野の桜にて蔵王権現の御覧
桜なるよし云ひ伝へ今もされは此山にて桜の木を切る者は苦罰す
桜の木は薪にせされは薪にならす桜の木は里人も見とこれは
これ神の木なれは恐れて切らすとそ 吉野拾遺云日本の花七里の
桜ありて花の此の方の人桜の苗植ゑて蔵王権現にたてまつる
桜を年々新しく植させて大切にす 雑筆

さて又十といふは六田の渡しを渡りて其の四里斗りにして
名所図会又云六田の渡し六田村より吉野の柳の渡しの柳の
岩とも云はれしは柳の多くありし故に云 桜の渡しとも云は上市より
飯貝へ渡る渡しを云ふなるへし 吉野名勝又云六田の里今は
里人むかしを云ふる吉野の川つらにて柳は多くあらさるなり
それは今もあるやと尋ぬれとも見えす只や僅にあるのみにて六田と
いふは上市の方より紀の国へ通ふ路にて北より吉野へ入る道の
ちまたなる駅にて是より下市より柳の渡しは西南六田より
出る者にて上市より飯貝へ渡りての事なりけると云ふ
まて其処にて則今云ふとしと名所図会又千本桜と云ふを
下同まて桜の云日本の花は七曲の坂の上より菜摘の桜
と一面なれは飯貝を見より見武峰の則ち之を蔵王堂

ならず果たる所といふハ此所なるへし 妹背山ハ萬葉集抄云
上市の方より川上の方へ流れ行滝川をもて中らぬへし 又西
山城東なる所妹山西なる所背山と称す由古今集
流れてハ妹せの山の中におつる吉野の川のよしや世の中
名所図会云 紀見の方より行ハ背山を云 西之吉野の形ハ由
桜川の方より行ば妹山を云 東之道ハ紀国山之妹山背山と云ハ
同し大きなる山之川を隔て南山北山をいへり 南山の方は吉野
河流の顕昭か袖中抄云 妹背山ハ紀ノ川ハ
又定吉野川の両方を山ハ紀ノ川をはさんて川中に
行く背山とふ妹山をいふへき山を...
妹背山ハ古今の歌よりてよめる紀ノ川の兄の山ハ古今の
行くは続後拾遺集 ふもとに至て此所の妹背山

兄とす無し 兄より外ハ吉野川の末紀の海までの間を河ハ
隔てゝ居るなる山なり 続後拾遺集
流れゆく吉野の川の世にもせて吉野なる妹背の山の中行の水
高取山城ハ古...の平時勝... 兄
要害の地南朝の頃築きて北兵防く... 天正乃頃
大和大納言秀長家臣本多太郎左衛門居 寛永十七年
より植村氏の居城となる云
桜田の花さて...国府の...并桜部の桜花
花...の事
名所図会云 花山の山桜田の花たに...大なる山の井
道助法親王
吉野山...植え桜田の下...の花の...標

吉野紀行　雅章卿

さくらかり花を尋ねて尾上まて たつねやいつこ三吉野の松

関屋の花桜ゟ柳か井坂の大きなり文治元年十一月十七日源の

義経の妾静か花尾坂にて蔵王堂の衆徒に捕はれし所

衆徒かたる見付てとらへしよし東坂にて花尾坂

信し花井坂と云大橋は北の辰の茶屋を云国栖の

橋也是は日蔵上人修行の此にて此所より出たる桜

川橋と云吉野紀行云千本の桜は谷の

さかりつききそめて人の行かぬ雅章

千本の桜とかきてよし野山花のさかりはまたいかに

桜川坂是も御名也西の谷の桜雲井桜とあり此

さくら八谷の子守の前雲井桜は二の鳥居の前なり

いつくの桜はさかりかな此の桜花の陰にみよしのの山

雲井さくらは花まはれ花に根を見え侍り

此桜に入る思ひは出ぬ口見雲井に花をみよし野の山

並百首後鳥羽天皇此桜の御歌也

さくらは雲井の桜咲き出る口見ゆる花の宿しなの字

花ちる人の数まてに見る程の千本の桜をさくら

さくら雲井さくらも此をさいかさくらにかまて

花の国分云中院花座念此下に稲荷なる大橋宗社須

御橋説社此事あり此谷は源義経夢御見さるし所之事

山伏かくし龍ほりてに宿りの家は佐藤忠信の身

かりそて横川の覚範の討れる所也又忠信防き矢

射る所矢倉と云ハ此所也村の尾花矢倉の上吉野山

いはゞ花菊の比ぞ名づくる里は名にのみぞ
嵐山の河守は都なりけれ
此ノ山ハ千本の桜の名所なり人皇八十九代亀山院
吉野の花を大井川の西に移し植らる
今の嵐山是なり其時勧請せられし蔵王堂の跡を
古人権現の垣といふとぞ

神振山ハ天武帝より五節の舞始まる
名所図会云 勝手神社の本社 御影山或は袖振山と云山の
山頭にあるらん 天女下りて舞給ひしより袖ふり
山の名あり 総じて神社の山をば古き名の説に多く侍る
御影山今は白浄御原天皇吉野の宮にましまして日暮に
琴を弾給ふ時に 神女出来り向ふの峯より雲気起り
神女のおちくる人聲聞へて曲を奏して雲に乗り袖を翻
かへす其御姿は天の羽衣の神女なりと乙女子が乙女
さびすもからひたゞは乙女の舞の始なり 神振山と崇
よりて此吉野拾遺よみ人しらず
神かくれ天降りし乙女も更に来て吉野の宮の昔語らぬ

清見原の天皇ハ吾妹人の船出の
日本紀皇正統記云 天智帝の同母弟なり
ときに御身天武を位を譲り給て後大友皇子に天下を譲り皇子
天下の政事をとらんとするより天武をさまざま大友皇子が
譲りを出家して吉野に入り給ふ 其後 白鳳元年五月
大友皇子謀叛のため吉野を出て伊勢の国を越
つゝ逢坂へ山崎にいらせ給ふ 此時天武吉野の宮にましまし

宮居の中に忍ひましまし折から国栖の翁栗の御料よ
そなへしに年経て其すて供御に備へ奉る故近き世まても忘れす
翁川に鮎を捕らせて其奉りし御命ありしとかや
浄見原天皇の國栖の奏の首尾を御代に至りて
翁の国栖に御後京ハ浄見原天皇の御代の御奏を捧く
御後京にて翁の綴りしに以て其事は世にも知られし所
御田御後京ハ翁の子孫よりて御備へさせて以て此御世の
折ふしよりも吉野山御田大殿より国栖へ一里余浄見
原天皇此所へ茂させ玉ふ翁の翁鮎の鮨御調備へ
しより供御の鮨を献り出て奉り川上よりきたる此君
御代に至らせ奥出させなんと心を安んし其中にて鳴かく
ありしに至りても猶舞人御代に至らせ玉ふに至れ

国栖のうらとて中にもやかの翁の西栖権守任せられ
今も末々まて権守といふ也
後醍醐帝ハ吉水院を皇居と定め義経も此院に忍ひ玉ひし
事も此所は古陣とは
吉水院ハ蔵王堂のかし先の町より北二町あまり下りてあり
蔵王堂より紀伊此院ハ谷より出たる所にて見れハ又かしこ覚ゆる
離れて一もとの岡にそひてハ谷之後醍醐のみささきあり
頃年ハ余りて打しまひ鳴らし入て見れは後にかの如く
ふる殿の図のことくすまゐの帝の御かたへハ後醍醐帝の御像
後村上院の御たてつかさにて御座まし玉ひて御仏の其も経のへ
なる又なかみな古き御かさねの物ともいひなかなかにハ奥
えしも覚えいれとも此國の図より見るの御社山もちより

高く聳えたり　名所図会云當寺ハ後醍醐帝の行宮
なりし所　延元元年ハ源義経難處とも出して整し軍
議御座の事　元年に及ひて衆徒今に破壊せしを
庭前にハ弱の足駄義經か力釘今に其形あり
文治元年源義経大物浦より風波の難を遁れ吉野山に
忍び居たりしに此寺の吉野法師等義経を討ん
とせしゆへ　又此處を出て中院谷に隠れしに悪僧等猶も
追ひ来る事有けれハ佐藤忠信独り残りて防き戦ひ其
静御前ハ捨て多武峯に趣き吉野の國栖室の千字坂へ
入られし也又後醍醐帝京都を出させ玉ひ此寺に
潛幸ありし時先帝陛下行幸ありて行宮しけるか後に
實城寺に遷せ給ふ　此院の座所は今猶こゝに残りけるに

花に寝てよしや吉野の吉水の枕の下に石走る音
近世豊臣太閤も吉野花見の時此院に入らせ玉ひしとぞ
賀名生ハ要害の所なれハ御廟所築く一尉の上
ひらきて南帝義御の詩みつけありし道ありハ
楠正行の最期の所ともいふ
貞和五年正月廿四日越後守師泰
師直南山ニ寄る南帝ハ天の川の奥賀名生の里に遷
玉ひ此所に行宮を造らせ玉ふと云　名所図会云後醍醐天皇ハ
賀名生荘和田村に行宮を侍る三年ほとの故址に古跡
楠氏尚近きと云後村上帝の皇居ハ黒岡村に行宮
行宮と云ふ侍る總稱なるの故址なり
如意輪寺ハ塔尾山と号し後醍醐社の坤の方

如意輪寺ハ蔵王権現の像之を云 後醍醐帝御
自作の木像御あり 新廟堂の左廊に安置せらる
並の遺品所々其うちに後醍醐帝の御宸筆の御詠あり
此寺楠正成一族の菩提所と云 此寺ハ御陵の
社の前より谷へ下りそれより西の谷川の橋を渡りて入寺
まで四丁程あり 寺ハ山のそばにいと物さびて有ける堂の
傍に蔵王権現 藤原権現の御像あり 是ハ此所の廊の
裏なる後ハ正勝の金剛寺にありけるを いと古く
見え侍るを是より此所に後醍醐帝のみさゝぎ 此月に此寺の御
像ハ御心せしめ給ひて 拝しまつるに 後醍醐帝の御像
ます 是ハ此寺の事等共に書せ玉へとて其外書の事あり
ますと所々あるし 後の世の人や何や尋出て見るべきと

又楠の正行が軍に出るとき矢の根にて壇の扉に
返らじと兼て思へハ梓弓なき数に入る名をぞとゞむる
といふ歌を書きしハ此寺にて候 それ本堂の後の扉に書て
此寺のうしろの山へのぼり 坂を上りて 木深き茂みを行き 後醍醐帝のみさゝぎ
の前に詣でゝ見るに 此ハ少なく侘しさ限なし 御陵の木の葉生ひ
茂りて作りたる石の玉垣もかたはらゆがみ缺ちらし
見るにあはれと涙こぼれて 物哀れ覚へて 後醍醐天皇ハ
南朝延元三年八月九日より御不予の御事ありて同月
十六日に崩しましまして 藤原之墓の所にあり 林の奥なる北向に葬
奉りしより幾年経て久しきを

御廟年経て忍は何をしのぶ草　芭蕉

此所にての吟なるを 又如意輪寺にハ楠正行同

西時同将監和田新発意甚兵衛付けるよし同書に
みえたり
判官の證弁慶の太刀口の山内ハ彦四郎痛腹の介錯ハ
せられハ忠信か宥信の地なり
判官の證弁慶か太刀ハ備中の社に埋ありし之處ハ左国府
また義経の證及静の舞の装束吉祥の寶藏ニ納めおき
いえとけ義経来證名ハ西洋の光明ニ元ひらりと迎寶藏
まつりしとぞ備中社寶物ハ愛[illegible]變命をうるしきりくれ
名家国分寺高梅山信手梅山と云大権宮古より第兵
まふとや大平紀成梅子元弘三年正月十六日大権宮寺
城ニ籠らせ玉へハ酒金勝寺方脇野[illegible]ニて攻寄る
大権の宮ハ御證として川矢ハ七本血の流れるは漸のこりしとぞや

此鞍ハ後の源義家に又村上彦四郎義光錦の御證を賜り
宮の御身代りとなりて討死と聞こゆ御馬とて高野山へ納めしが
義光宮の前なりし頃矢合せの時筆文字にかき埋て後なる
べし佐藤忠信座後の[illegible]したるに今以伝へ侍りつしとぞ
ありしの茜吉野紀行
折ふし御ハ吉野の花も今をさかりの頃にて岡の辺にてぞ
ありしの岩ハ一つき茜ぞて倒れし花もむすびとのみ見えさりし
高根ふきそれハ遠の岩の上に花もちりくるみよしのさと
静女の舞の装束ハ静か舞の装束納め
義経記云静ハ吉野の捨子に而名中院殿に寄もとる
所なりし静ハ栬生ニまきれ之それを義経殿にて語て
多くの衣裳静御前にて法楽の為にすえ置ける古證文治

元年十二月吉野法師静をとらへて鎌倉へ渡し奉りて
同二年三月頼朝之前にて静舞の時の歌ハ吉野山
その中ハ秋の時の花盛なりしとぞ
子守の勝手の宮也蔵王堂の東隣 此社の後根拠 永住ト云者あり
芳野日記云 子守ハ十八町ほとしるす子守の神ありまする
あるきことにみくまりの山よりあまり遠からねバその文字はみくまりと
とかなよみて一の木の山より流るるは御門のみかや
又 みくまりの山よみて中津にハ子守の神ならん今いふ
子もりとてかみの子の守となる神ハ祀らへまつる事とかく云々
国史ニハ吉野水分神社祭神ハ天之水分命彦名命栲幡千々姫
命其名彦名命名水分国分云但吉野郡にて吉野八大
神祠の其一也同社の後ニ在勝手の再建社壇美麗

別して勝手の神ハ静御前の舞之事有拍手集
[illegible]山ハ花の秋まで吉野の花の神なり
吉野紀行大淀ニ稚足之
みよしのの山のさくらは[illegible]花をこそみれ
桜本の宮今勝手の明神かたハら不動明王地蔵菩薩の行基作
花深春の法印[illegible]五蔵ある桜本ハ大塔山の事也
吉野紀行云 桜本の宮ハ大塔宮のゆかりをとりて花の坊也
御の宮にて鐵出[illegible]
御の宮跡ハ花をまちて吉野山[illegible]桜本の宮
大塔より五町[illegible]吉野へ帰る道側之左の方
山の林の間に小社あり是桜本の宮之名所図会ニ
村のうちにあり云々

萬葉集にいふ金の御嶽の神社今ハ精大明神と申て此山の
しかるに神之桜源く今にて華厳院の西にありて其前を
太いひつたへたる也又安禅寺之名ハ国分云金峯山寺の名
とも号す三代実録云貞観元年正月正三位を授くとあり
当社も吉野ハ大和の地にして金峯山寺の法やうや金峯
嶽吉野山の一名也源氏物語にハみたけさうしとかけり是に
うらうちし山の奥金峯とて所におかれる社を金山彦と名する
所にありし此所宝治捨遠す之とも是安禅寺の堂一丈の蔵
王権現又役行者の遺像安置せり是より四町程正面に堂安
禅寺より三町ほとに奥の院あり其傍に蔵王堂あり力をもて不動ハ
頃見村の坂の上の小刹に安す力ありて不動の像あり
捨て其前に桜四ツ地蔵ハ東師の宝篋印の巡拝

すなはち安置せり其一躯ハ吉野山の上千本下市の方へ
ゆきて蓮華両堂あり法はたの其外多くありといふ
ありといふ
高算上人ハ吉野山椿山寺に住し後更に荘椿尾村
にて入寂せし其後蓮華会と云二月花供懺法ハ此上人
の始めおかれて今に絶す吉水院花供会云二月今式は
正月にて当月より来る月まて長日不退の行人籠り給ひ
華供といひ満堂方の懺法と称し大華供懺法の両行人
二月朔日本堂へ出仕御供神酒献供捧物ありて
の庭にて行ひ錦しく饗応まへ世俗是を吉野の
花供といふ須臾も此日御山二王か満山の宮社不残御供
神酒供米献備ありて大会正月十五日二日の花華供

械治の西河坊より施行の御行を国の奥人にも殺しく
非を集てきく三多国分尼寺国分寺と棟うる寺并に金堂ハ
筑前守神社へくしら国の迎来寺行ハ此寺前ハ此金武
行ハ紀ねハ須解云此日子を衛士の両社の神輿二基を
王東ハ海ハ三そて神楽始合せるを以年行ハ就を堂
まくに下悦ある故方三合ありて清然を絶所行行くく人緑
果る伝四里くとみく三多国分尼寺国分寺坊ある寺并に人
とも云ある寺無とふハ済むるへし
尼寺国分云五基ある梅寿坊其又甚悦 猪近より大宰よりまで
大宰府 高山の先達りして二宮の所門院の敷合行
太宰府宮所 西はの所へ所 坊ハ所清所尼所薬の門より
とくの清水 かきげの橋 神子の人あ

菅原信云今日ハ所とも尽きまうんて其ころ寺ミの所役より
奥ハ人の家まく只梅のミハ藤ある中間を家けまく梅やおそれ
とろ示さんて 夏まるの谷を名つけるかし文いふ梅多くて
然るあと梅咲きて大きなる時けの名ありけ二の名右に人所あり
門を名つくらや 今の所ハけ神社ハ今梅本四郎といふて此山
末ろしめして神とみて此所あとかしれり 一本の木て所あけの墻
とろく古めかしき 墻所り梅の原を見て菜畑所り所をはるる
あまた大く坂しらかれを安楽寺之藩主を有故の国太宰の方に
参りまて東方之本にけき山ハ高経の家之とて此墻の家
よろもあるまくるを所ゆ榊へまうつるるを東方の
谷の庭ある小豆島の下る西又東北の谷を見たくたこける故ま所ハ
田 梅とを見けて前そ折るなる山の背はなさいま々なとて

いとをしきて かの柏崎のけふりは都をこひしのぶよ
若しくは此柏崎の里より西河の里へ安穏なり
一里ばかりもいとおそく見べき山の中につきぬれば竹原など
きられ所なき里なる家毎に紙すきて門ごとに干せるこれ
なむみぬと彼らはいふなるにて見かけもすれぬさて大道
にかかり里の名をきけば若川とぞ申せる柏崎の名もかはりて
あくいさゝか登りて山のかげをすこし入る越ゆれば大沢村なる
けふは泊りたりける明れば赤沢の伯母なる里の里人いはく
それより吉野川の川のべに沿ひて沢を出て川づたひに越前
をも見渡すと申して上りて高き柏原なる沢辺にいはほの
淵はありていと流るるすさまじ見てそこを見渡し萬
年へぬる木も古は岸の荒くつゝいて生えて

のそきつゝみをきての流を見下してそれは大きなる岩にそのなかを
らは高き所より落ちて大きなる川の岸の落る水音
高まて瀬けなる激流のけしきいふばかりなし
其中に見わたるに凄し
名木国今云太沢清水の沢より五町ほど一名西河沢といふ
太沢を云ひて彼人の云はく雅路を千すぢ程は嶽より岩なる
鳳凰弓弦第の井紅葉大沢村より一里余
太沢を出てなるまでに出て彼の清き河瀬はきよけき
昔云西河の方へ出つゝ柏崎の里にて見れば
一町ばかり出て水の流き若くはかくてそこ清水の沢は
その見ばかりなれ太沢よりはやくかへりて三けん山の岩のつゝきた十丈
あるいは岩の流る沢とにさる水はし出る岸の

よりて今瀧の前に行て見れハ上も伊勢の白妙の見わたして上は
せざきる瀧二丈ばかりもなくして落て末ハこそて入
かさしき深山木に生いるまて大きさ岩の端ふれハ宮あんふ
のさく擬ある所へ宮とこみて落くだるしき其なるしくこか
ごしかくこれによりかされ岸のしそる所より岩根はより落来る
みなし清かり空をて瀧の岩は見れハ水ハ桜より落来る
岩間よりおけ八間二丈ある岸のうへよりおちて　根ハ世はなれて流るゝ
そうも瀧ハ世をて岩間のうへの岸より落て落くる末は里人の
宮居をいとなみして名付し此瀧は清瀧とも云　陰陽(カゲヒナタ)の
小社おはしまさる名をいて虫の陰陽あなんと云し人の言ならさる
ゆりしり里人ハ婦の瀧に参りあれハ姫ハこへてさえ宮んを語る
清瀧といはうしらるきとなむしつらん今瀧の根源なる上ハ細くて

瀧より下瀬の岸きハ幡の如くにそりかへりて流るゝ事たとへなき絶の
本にて通ふさんめれハさる名つけ侍へきと思ひそうし又其の幡の
瀧ハ是を云流れ其瀧之其いへを里人のいふ此瀧の事へとかいらん
といしるへく

名所図会云　陰陽瀑布　西山村にあり陰陽の瀧ならんへきと
瀑して清瀧瀧とも云へし　瀧の上なる山は琵琶山と云
此瀧の末は宇治川に注くへし　中末の瀧を名つけるといへり

新続古今集　源義詮朝臣

　　末ハ桜にの中に落る古の瀧も流れて

若菜古名会云　山ハ瀧の岸と云て　はしき盛して
鹿瀬の神社ハ　さしとけハ　それ　板瀬なる　皈る宮は
麹とはいゝ　も　ひの山なる里ハ　瀧にて　古府の川ハ宮

かき里の[illegible]何れ人渡りより一里ほとより北ハ一里程[illegible]
つし然の西橋なりとみえたるハ[illegible]川之下ハ上流へ[illegible]
寺ありハ古人[illegible]言伝て[illegible]道遠し[illegible]
[illegible]し[illegible]といふ[illegible]やはり[illegible]の川[illegible]
又[illegible]くる[illegible]之然の[illegible]の[illegible]て[illegible]
なすなりつ[illegible]の[illegible]て[illegible]
大川[illegible]の[illegible]之川の[illegible]の[illegible]て[illegible]
[illegible]の[illegible]て[illegible]
[illegible]橋[illegible]の[illegible]橋[illegible]て[illegible]
[illegible]橋之又[illegible]
[illegible]川[illegible]て
[illegible]川[illegible]て[illegible]

[illegible]渡ハ[illegible]川[illegible]
[illegible]
[illegible]橋[illegible]の[illegible]て[illegible]
[illegible]川の橋[illegible]て[illegible]川[illegible]登りて[illegible]村[illegible]
[illegible]登りて[illegible]
[illegible]て[illegible]又[illegible]
[illegible]の川[illegible]の[illegible]て[illegible]の橋[illegible]の
[illegible]て大川[illegible]川之[illegible]山と[illegible]の[illegible]
[illegible]国[illegible]の橋一名[illegible]橋八雲[illegible]の
中川ハ[illegible]て[illegible]橋[illegible]川[illegible]
[illegible]ハ[illegible]村[illegible]十二丈[illegible]七[illegible]村[illegible]て
[illegible]流[illegible]て十二[illegible]て[illegible]西[illegible]法師

去れは松尾の川の鶴羽まきまへ申はなかりけるとて
夏至川ハ吉野川の上流也といふ事は媛神父いつて是英
なれハ今も年々南社の供物をさゝけ之に依て今も川とよはるゝ
水源ハ雲国今に吉備水西に清流薦宴殿有後像要有の
御よ

流くもよしや又清む人傳し 継子すなる山井の水

浴船其云西に人の芽のかりの跡ハ東流より大の方二町許
をけ入ぬ傍に生人の通ふ石のるとつかすとし きこえき公卿
偏なりとも見えし 継そくの清水ハ萬葉にもよみたれハ
それとし上古清なり

露らく心をよせすゝもや と成

東流ハ安穏なるとかり 松本寺家西国寺吉備の家なり

神子のまへなる石作 松尾よりまた山下にけちりたる出雲守よ
りの清水の山崎之神社にてまつる丹波村より新羅嘉
考續清水

ここに年々又山の御律例も末ハにはかの流るに
是等なや河の久松尾なし 之旅のまへの大御西河卿ハ
此の之清水の御媛神 此の之是ときの中なりし
いさいかなるや

継子の尾の清龍女の又去るみ 大彩夜人の像を見るの清井

證畫記

継子の尾山世にある橘清輔田保延五年庚申平朝臣忠盛
之く 橘本寺也古為本像の媒之云 為中国住之古清之
許田保延六年十二月 橘慶寺平朝臣忠盛之く 何事也 [illegible]

是より少しゆきや世にいふ獅子ヶ尾坂の上に至り四條の侍形井の
堂あり人麿塚鐘ヶ尾の傍にありといふ又云中納言の
答は源義経身は隠れ一の谷に上らず出家せりなりとも
定めたりしに大将殿見家の大弁隠し候ふ松名古国寺の所に出され
貴之あり此云寺の所社より奥は人の家なく只松の生ひ
茂りたる中にかけ出て往き去る者をとどめける不為に
至りて右まろ右朱の名あり二ヶの弁と又此行り満足なりて
ともかく名所図会云檜嶽西河原の上にあり出雲義経
此所にての御説に云ひ白き幡を立て此寺に住みて今もありき
稀なりしよりかく名所となりて稀有なりし
かくれたりの山を樵川坂琴堂琵琶山まで板を顕し歌毎に嶽
和漢名図会云紀津寺醍醐天皇四年御狩の時此来りて

天皇のこゝろざしは咲く思ひ給ひて此をかりて見せさせぬ
天皇の御こゝろは歌を見て称美しおはしまし其跡は桂琴所と唱ふ
跡は小かけりの小坂といふ山川の荘西河村にありといふ樵川坂は
名所図会云天皇猿猴楼梵天社樵川坂と名付給ひて
古御猿の縁あることく猿らんの鏡を奉りし琴堂
にあり此所にありしや詳なりし国志云琵琶山小名村にあり
附二條行り高さ二千余丈周囲一八高十五丈計
斗の岩を云又天の川ほとり村白岩なる琵琶山といふ名は敢行え
大嶺の峰頭は開き出でんとて先此山にして見給ひぬると
あひしよ又岩巌より流れ落ちしき瀧をも見て国史を流うつやます
扇子は琵琶の如きありて人皆の迷ひたるは撫ひしより琵琶山
と名付せりと千年今日の参詣に来りて天女現し

王ひしらは廿三信仰彫刻し御霊は往古より円融院天
皇也 又宗像郡相生村に是円荘二十一村氏神なるは
妙音院を号す 観音堂地蔵堂薬師堂有之を護摩
堂 二重塔鐘楼僧舎二十宇 頭陀院神福寺 集迎院 有之又護良親王
寓居の所は竹下坊と云 別当達院あり今国分寺僧
在東叢年 入定于此 自此入大峯之地として名所図会に
其頃相模守 安藤某 上古より此所に住居せし故 名あり
義経こゝに来て馬に乗り下る 此東の谷に義経屋敷あり
行の程より谷の漢より下る 新羅遺跡
上の川尻の浜より此往来のかたへの道に
又古山上の嶽は吉野山より南方 洞川の東南なり 岩谷
まて大峯山上少高の二峰を隔て今は高野の菜畑あり 天川村にあり

又洞辻の茶屋より 洞川村に属す 是より大峰山上の二峰は
属して縁の辻君西臨の岩 行者山頂に梵閣ある
蔵王権現役優婆塞の安置なり 又古跡より西の岩巌なり
南を行者の酒出の岩と名つけ 東北より行者 蟻の門渡の岩なり
東臨の岩 行道の岩 屏風の岩 東より一町あまり 稚児の嶽 岩にて
僧舎六坊あり 吉野の山僧これに兼帯して 又東行一町あまりに
小篠といふ所あり 行者堂 聖宝堂 護摩の石塔
あり其他此所より 六所集会あり 清所
行者堂より小さきの西の方に行けは山を越して熊野の地
又西南の方に 脇の宿より 一の宿 篠の宿 山上嶽集
にかへて其の橋の左 篠の宿 七日月の宿
又東の方に 宿にいたり 其の原に 岳にいたり 又南の方に 前鬼

ゆけハ児宿といふ所より其南の方百足許に行者堂と云
所あり 行者堂より八町登れは御山と云所あり又南五百足許
ゆけハ釈迦岳に北の方より飛山南の方玉置山まて続
大峯中と云 山家集

行者の心も児宿につきぬらん道すから[illegible]岩屋
そこに[illegible]ハいつも雲かゝりてさひしくそ[illegible]
あこのしめりきて[illegible]いつらかふらん[illegible]

岩屋やも[illegible]ひとり[illegible]行者ハ心ととめて[illegible]
[illegible]のかれ[illegible]るまに[illegible]
小篠山に住る月はかくれさりけり[illegible]
御山ハ山上嶽より南の方六里許行て其所御山嶽北に
[illegible]行く[illegible]又所山より南の方十町ほと大日岳

行ハ又其南二里ほと行て小池宿といふ所より平地宿ハ又南三
里許行て是より二十町南に至れハ[illegible]山嶽といふ又南へ
二十六町行て佐陀辻行善宿と行て是を経て天狗
岳といふ 山家集西行 天狗岳より南の方一里余に地蔵か岳と
云南二十七町ハ東屋か岳と名つく又是より東南十八町
ゆけハ千種岳といふ石 仙ヶ嶽と名付て又笠捨山と名つく
姨捨山と連なれハ此名付る也又西の方三里二十町に古屋宿
行ハ其南一里十四町ほと行ハ花折宿より其西の方は経尾と云又
西南二十五町ほとゆけハ土室岳といふ又西南五町をゆけハ玉置
接待といふ 山家集

姨捨ハさらぬのさへ[illegible]月すむ峯の名をそたてける
捨遠草

云葛城の山の岩橋もひとつ霧む雪の際
吏大徳ハ役優婆塞をして岩橋をかけしより事ありて諸
葛城の神ハ醜陋の面貌を恥て夜ハ岩橋をかけし其事より登
り給ふ金剛山と云し 又洞川より東へ八十町ばかり金剛山と云るを又
逆峯と云ふ是聖宝僧正の開きし所なれ静かなる岩岫ハ行者の南
岩をくだり一つの岩瀧あり是を岳と云ふ那智の瀧山を流れて岩
雄峯にして其瀧の下ハ石の状甚だ見事なりし善見の里 北山荘
十五村の内也 葛栗村堺田の里より大峯山南山へ行女人の禁所をのぼる
登る人ハ慶運岩見村より登る此所ハ慶運をもて女人結界とす
上よる其の都を見るなり 都藍尼と云ふ女人ありて南山へ登る
志の甚しく 金峯山の禁を破りて我女人なりとも仙術を得たる
ものゆへ其いはれんと大峯にのぼる時雷電霹靂

として通路を失ハしむ其時にて拄る所の杖枝葉を生して大木となる又呪文
を唱へ鉢を飛しハ鉢行出る所にて誦すとみえたれは
都藍尼怒りて登らんとすれと巌はさみ谷はくぼみ
ぬれハ破れて微塵となる故ハ此峰へ女人ハ一足も登る事なし
其跡今に古跡とて其場所有へし

七十二のいはや

八十の窟を皆順逆にての通路なるへし
大峯南山の修験道の山伏の峰入する峰中に云 八十余の岩
窟なり 蟷螂窟 聖天窟 菊の窟 笙の窟 蟷螂の窟など是其
蟷螂窟ハ深さ十二町余 窟の廣は百人余も入る 裏は滝ありて
菊の窟などの岩屋を菊の後ろにいはせて修験者の秘所なれ
いやしくいふなるへしといへとも 梅を七十二のいはやといふなれハ
山の尾の麓より山頂の峰なるへし 峰中の嶮阻なる所

無まりや

雍州府志云往昔慕後行者入峯路毎年自熊野入葛城大峯出吉野是謂順峯入亦後大蛇自大峰出擁道依之入峰年久絶然聖宝自執斧鉞自吉野山入大峰山後始自蛇尾寸々截之遂出熊野是称逆峰入宝應興福寺維摩講請有功名貞観之末闢醍醐寺延喜九年七月六日逝年七十八云春秋之峯入春謂之順峯本山方勤之於聖護院御門室撿校之三井長吏増誉僧正其始也秋是謂逆峰當山方勤之於三寶院御門室被行之云々

處ハ頭巾法螺の貝

頭巾或ハ頭襟の字細用ゐ役の行者の法流修験者の頭にいたゞくもの也十二の襞襀あるハ十二因縁を表すといふ也

宝螺ハ又修験者の持て用る法器也山野を行く時吹けハ猛獣をさけ蚖蛇の類を遁るの良器なりといふ也

火打燧袋漆器栖しるしの類鉛瓶錯杖木の類細工物

材木山折敷

此品々何れも吉野の名産也和漢三才図会云漆物京紙うし漉紙蜀粉栖栖子漆器錦絲樫国栖紙漆の椀盆の類吉野の名産として雛鳥ハ其器の状似たる栖の曲物之国栖紙ハ宇陀紙ともいふ椀盆ハめづらしといふ女高人の所望にて売る椀なりといふ名所図会にいへる

さてハ吉野にて名高きもの所ハ桜にて名所挙ていふ勝なるも

奥の院まて中の山と前後の谷と峯よりとく
雲のかゝりてよし

古今集序 吉野山の桜ハ人丸か心にハ雲かとのミなん覚えける

万葉集

山たかくおしくまて色の雲なるハ谷にも尾にもつゝく白雲

続後撰集

みよしのゝ山の桜花白雲のたなひくと見えしまゝにて

吉野の花ハ六田の方の林よりの奥の院まて百脇町の万民家
なき所ハ大門前後の桜こ又桜の傍も下の谷も桜の
植る所ゝの谷にも皆桜多し桜と桜のまハ桃も見え
花開初る頃より山を咲のほりて奥の院まて結ひ禁の花盛
是て中の花盛なる中の花盛是て上の花盛を聞くその

閑大寺ハ三月日中之と又里桜ハ彼岸より咲きて末の末寺
後の花盛の比盛に開く故に神事ハ盛りも咲之
元此山の桜ハ皆一重也八重桜ハ山中及ひ民家僧坊に一株も
なし甚不と読ても謂やくるへし

浪花の咲やあまハ落花の浪紛あけ

古今集つらゆき

桜花ちりぬる風のなこりにハ水なき空に浪そ立ける

浪花とよむハ街にとふそ問しるへし

木の間の嵐ハ花ちらぬ雪紛ふらして

拾遺集つらゆき

桜ちる木の下風ハ寒からて空にしられぬ雪そ降ける

林藤ハ奥ハ花もなし 開落後山の満源より咲き此山に

のほかにハ作りし花の趣なる知ぬ物にや　吉野の名目ハ伊勢
桜江戸桜 大桜 樺桜なり
伊勢桜ハ継桜の種之至て遅く咲て俗に 尾張の国よ
りきたる八重の花にて名をは江戸桜是も遅桜之事也
赤し花大輪にて並よく咲ものなり 故に御殿桜又俗に
といふ 此樺桜ハ関東よりも多き故に名付ハ大きさハ中くらゐの白花にて
にふ樺桜なくてハ山桜の類ひ一重桜之其外の粉を称し 山人
常中よく言ふ也
うき桜ハ葉のなき花ハ云ひ志保竈とハ遅く咲くものなるや
羅山拾穂曰此花繁英而枝上如無葉老婆多落歯無
歯葉與歯和訓相通故謂之姥櫻 源氏桜ハ至て艶色
なり其樹葉なくなるて 故に葉まて見えぬなるといふ義之

一説
熊坂といひ楊貴妃と云
楊貴妃桜ハ興福寺の僧玄宗といふ人の愛せし 故名とし
大輪にて紅色なること海棠に似たり 睡海棠の故事まて
名付る名華の数に備く 討死のかハ熊坂といふハ是
これハ奇なりいかなる花ならむや 作桜の桜よりは近しくして
花の内熊坂きそとりて色香ありて見るに紅色を帯たる桜
成なへし
世に名高き杜若ハ八橋と名付 能く重る杜若のみは高輪村より是ハ
三河国八橋ハ杜若の名所なるか在中将のうたにて 隠れなし
高輪村の杜若ハ名仲の長根十二人寄合て京へ入しかうて
名高し是 杜若花の咲出して桜の桜中なる為ともて

されハむかしより桜の名に吉野といへる花の名をたてし吉野
ときく桜ハ理屈につけぬものとこそいふみなるへし
是桜の枝葉茂りて吉野の人桜を餞野におくり来るなと
いひ桜ハ吉野に名高くよし野ハ桜にて名の峯まてといふ
ふし桑に封し二十一代集の和哥の数百首に称美する發
清御法はいろいろ也此山中の千一の坂より里程をへたて是
よし野山に登るの首途なれハ是蔵王一の坂はいろいろ当の
渡柳の名もし柳のもと丹後杜も吉野の社にあるき一の
坂といへる乳母井雑事吉野紀行に云桜一本の
ゆくてに絶ゆる所

みよし野や桜一本にさかへて山桜を白雲か
よし野の山よりみなみ吉野山のすそなりけるハ義楚

古枯も金峯山といふ山に杉楠名花軟草ありと云唐
土にも称美して文山岳のすそなりしのハ比叡山比良山伊吹
山愛宕山金峯山神峯山葛城山と七高山に当て称し
又皇帝の地とし霊地として特に崇らるへきハ春花の
候とされハ此蔵其外の峯揚といへる其中桜花
おほさかりの頃し一目万此蔵内にみゆる地の殊よりし此道雑
を称するに桜くさみの地に植るところもあらハ
其実を求はえさる事ハ実枝の土刪補せは身を欲する
それとも且云此蔵大和名所図会に載せたるも豈史書の
実を伝へるならハなるへし

風俗文選通釋巻之五終

風俗文選通釋巻之六

賦類

松嶋賦　芭蕉翁

奥州松嶋ハ仙臺の東に在り松ヶ浦嶋とも云天下無双の景地なり事跡考云諸国松嶋此嶋ニ亦有小嶋若干ニ殆如盆池ノ月波之景境致之佳無雙天橋立安藝嚴嶋ニ為ス三所ノ奇觀ト云々俗云昔天仙爰に天下り松の種を嶋の名とす故に松嶋と云芭蕉翁賦の作其文大略奥羽紀行の中に委し

抑ことふりにたれど松嶋ハ扶桑第一の好風にして凡洞庭西湖を恥ず東南より海を入て江の中三里浙江の潮をたゝふ

徒然草の第十九段云みな源氏物語枕草紙なんどにことふり
みなれたる翁也又紫式部が源氏のことにはやさしき字
みな事をもとめしは此源氏を物語とは云流行色柳ハ
名語の様なれは此物語を見ならひしハ紀行中の文段様出
物をや又事ふりにしハ様なれとも其時ハ好ましくさ
とかいはまほしき古ふりし柳かげなりけるをかくハ云なるを
の心ある人もまゐや洞庭ハ太湖の中にある山なる事赤七十二
西洞庭なるもの見る所も錯夏湾なるもの洞庭の勝よ
物いふ所ぞ 王世貞云西山皆中空其下洞庭の名の起る
又云西湖ハ浙江杭州府新城の西南にある名所の風景
人のしる所なり又図会云浙江當日本九州之西海
上三百五十里而北隣南京東限海岸其地風景無雙

而民家繁華華倭相去無遠於此故商人毎出帆船往
来于日本之湊也云々 松島の風景にたとへられる
なりと
七十二峰数百の嶋々歌川のものハ天の指をりてよむハ彼よ多なる（匐）
所々ハ二重三重にかさなりて三峰にたとへて其まゝ大きくまゝ
皆石を抱きて松をいたゝき緑愛すへきも園かたちの
瑞巌寺の外海の地の海内嘉を屏風に
松島名図会曰松島ハ海中有小嶼数百曲洲環浦奇
峯異石寔是天下絶景而其嶼或ハ似地蔵毘沙門三王
大黒恵美須布袋等之像ニ或ハ崖大鼓屏風甲冑等之形
者不悉記雄嶋籬嶋千貫島松島殊名高し故以松嶋
為惣名買船乗小船巡廻遊宴尤不経十餘日者不尽見

也塩松紀行曰既而衆島觸錯左右旁午艇夫歴指喋
々称名名皆由状七十二峰と云ハ洞庭七十二山の数なるへく
いふなるへし
籬か嶋ハ湊の小舟漕つれて肴わかつ声〻にけふ（?）
よみ給ひし何の浦 末の松山ハちかくなりて松の下陰暮かゝりて
明行侍し枝葉たる鐘の末に紛れハ皆かくのたとしと無し
奥の細道云塩竈の浦に入相のかねを聞く五月雨の空
いさゝか晴れて夕月夜かすかに籬か嶋も近し 塩松紀行云
塩松相接綺繡無端倪左者曰籬嶋蓋巨巌而當潮
汐之衝故名歟 古今集雑抄云 志賀の浦の沖にまかきか
しまといふ所あり 古今集
我せこを都にやりて塩竈のまかきか嶋の松そ恋しき

同みちのくうた
陸奥ハいつくハあれと塩竈の浦こく舟の綱手かなしも
みちのくハいつくもあれと塩竈の浦こく舟のつなてなるらむ
歌もうらかなしきよしをいへり 此哥ハ面白くと覚
和漢名所図会云 末松山 松島也 次在海道 又有末松山中
松山 長恨歌云 在天願作比翼鳥 在地願為連理枝
是明皇と貴妃と相盟ひ給ひしの誓ハ世にも通の
恋情のかたなりと
野田の玉川 沖の石 宮城野の萩 武隈の松 精しく此境に名所多し
新古今集 能因法師
夕されは汐風こして陸奥の野田の玉川千鳥なくなり
千載集恋二 二條院讃岐

我かそてはしほ干にみえぬ沖の石の人こそしらねかわくまもなし
古今集　よみ人しらす
みちのくのあはれをしらぬこゝろさへなけきにしはしそてそぬれまさる
源重之集
我恋のあはれをしらぬ松島に秋まてぬれしひとはなきかな
塩竈の浦又ハ塩竈の明神　神前の古燈籠　文治三年泉の
三郎寄進と云
和漢三才図会云塩竈六所大明神在奥州塩竈浦祭神一座
味耜高彦根命　相伝往昔当社明神始テ焼塩而奥の
細道にハ右宝燈にかけたる泉三郎忠衡ハ伊達泰衡
少平泉の城に住て無量光院の北の方に古城の跡ありと云
雄嶋　雄嶋ハ地つゝき出て雲居禅師の別室の跡と坐禅石

松島ハ五大堂と其頃は松島山瑞巌寺と号して小しまハ此
嶋のうちにある事をいふなり　続後撰集源重之
松しまやをしまの磯にあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか
奥の細道に雄しまか磯ハ地つゝきて海に出たる島也と書る也　文
瑞巌寺雲居和尚ハ奥の松しまに住し　見仏上人と名聞えし
雲居禅師とて見仏上人の明れはいたりてやと云　此瑞巌ハ
西行法師の歌の人にして結びし庵の跡なりとぞ
瑞巌寺ハ松嶋寺の朝入道の建立　当時三十二世の昔　真壁
平四郎出家して入唐帰朝の後開山すと　伊達政宗再
建して七堂伽藍となりける　清浄なる浄域を見る時　荘厳新
しかりし　古縁深きかな
和漢三才図会云　瑞巌寺　在松島　臨済円覚二里許号松

瑞巌寺開山法心和尚中興雲居和尚真壁平四郎ハ法心
和尚の事にて入宋して径山寺にて無準師範禅師の
弟子となりて帰朝して松島の開山となる塩松紀行に曰
本名松島寺籍天台ニ華ヲ為禅刹ト更ニ名円福ト大ニ振仏
鑑之道ヲ爾来多ク歴年所ヲ法幢頽ル慶元和中貞山公
一ニ新之ヲ亦易ヘ以今名ヲ請円満国師ヲ為中興祖ト蔚為ル奥
奥之雄刹ト焉と云円満国師と云ハ雲居和尚の事なるや花録ハ
梵語なるべし

松のみどり細やかに枝葉汐風に吹たはめて屈曲おのづからためたるが
ごとし其けしき窅然として美人の顔を粧ふ
此語ハいかにも清華なるのみ何もいはれ広く松樹の形容なる哉
又所謂窅然ハ荘子逍遥遊ニ見えたる詞にて郭注ニ

窅然ハ悵惘然としていみじきやうの意之東坡西湖詩
水光瀲灔晴更好山色朦朧雨亦奇若把西湖ヲ比ハ西子ニ
淡粧濃沫両ラ相宜シ美人のなやめる顔にたとへしハ風光の美観を
つらねたりといふべきならへし発端ニ美景ハ洞庭西湖ニ恥ず
とて東坡西湖の詩の心をうつして首尾を結ふ復て照応を思ふべし
ちはやぶる神のむかし大山祇のなせるわざにや造化の天工いづれの
人か筆をふるひ詞を尽さむ
按ずるに大山祇神ハ木花開耶姫の父之伊弉諾世紀の物り
山神之ことを見絶勝を嘆美するの余情之ありて此ごとき
翁も筆をふるひて詞の尽すところハ取らへて眼らかしもして歎息
はたはり錦をさふ雄松の浦を行々と松中の吟わろこいふとも此
備栞をえんとも書しくはへて給ひてのせられさりしとや

冨士賦　嵐蘭

冨士山ハ四海無双の名山にして駿河甲斐両国にまたかれる
といへとも駿河の冨士とのみいひし駿河の冨士を
以て和漢三才図会には其方略を別にまとめて見る国を
まくらことにえらひけるをわか冨士こそ此山之神女体而心
欲スル冨士男士ヲ故ニ世俗祝テ以テ名冨士也其外説従多し
不二ハ日本の蓬莱山ともいふ孝安五年山そめて現す
異氏筆乗ニ曰日本國亦名倭國ト東北数千里有山名冨
士ト又名ク蓬莱ト国中最モ高山也云々蓬莱ハ神山也列子ニ曰渤
海東有山一ヲ曰代輿ト二ヲ曰員嶠ト三ヲ曰方壺ト四ヲ曰瀛洲ト五ヲ
曰蓬莱ト華実皆有滋味食之不老不死所居人皆仙

聖之種云々日本の蓬莱山とハ神山なるをいふ也
神社考曰孝安天皇九十二年六月冨士山涌出ス初雲霞
飛来如ク穀聚ル方無峻岨後チ頂上ニ五盤石出ツ其落チ下ル趾作ル
溪壑取テ郡名ニ而曰フ冨士山ト
旧事本紀曰孝霊天皇三十六年正月駿河国東西南北ニ
剌國中ヨリ出ル大海ニテ一夜従海中出ル大山ヲ埋ル一日従天雲降リ
磐石土續ク山嶺像如ク八坂ノ瓊ノ又若ニ精米ノ累ヌ云々
和漢三才図会曰孝霊天皇五年六月冨士山始見ユ蓋江
州ノ湖一夜涌出其土為冨士山故ニ于今江州人七日精進
其餘ノ人百日潔齋而登山云々
万葉集山邉赤人冨士山を見てよめる
天地之分時従神左備手高貴寸駿河有布士

能高山頌平天原　下略

又新拾遺集　素暹法師

神代より煙たえせぬ山の松ハ雪やたゞりて山をあらん

此うたをうかゞふ所ハ富士山神代より有る事明らけし　按

和文釋都良香富士山記ニ涌出の事を如是伝　孝昭天

王の御時一夜ニ涌出すと語り来れるハ四年申何ニ

なつて知べし　此説ハ和漢三国なと云ハ孝安天皇之

五年ニ涌出すといふ説等あるべし　江州の湖一夜ニ湧出

し其土富士山となるとハ近世俗説にて信じ難し　山をと

神代よりありて雲霧ふかくして始て見えしといふ説ニ始

振ふべきにや

徐福ハ此山に登りて仙薬を求む

史記に拠るに秦の始皇帝の時徐福仙薬を求めんと始き

て海に出て遂に帰らず　日本に至りて秦氏を称

するや　新撰姓氏録　太秦公宿祢　秦始皇帝之裔

皆始皇帝の後と云　徐福の後なりといふハ後世

秦氏のうち徐福の後と称するものありし事を知るや

かくや姫ハ神と化して富士に昇るとも

竹取物語に拠るに竹取の翁といふもの竹を取りに山に入る

に其竹の中に三寸ばかりの人いと美しくて居たり　翁ハ養ひ云々そ

の子をかぐや姫と名付く　此子成長して類なく美しく国中ハ光満

たり　然るに帝此姫を召すといへども終に仕へず　月の都へ昇る時

姫ハ不死の薬を奉りて去りしを帝ハ深く悲しみ物語

終に富士山の上にて焼かしむと云　拠るに神社考に昔此編

の里の老翁竹取の園にて一女を得る帝美女を
撰ませ給ふ使者を遣して召し給ひけるに此女を
美女仙女にて天上に帰らんとて帝に遺して不二
山に登る帝恋慕し給ふ此山に登らせ給ひ後は鏡を
山にて箱を焼きて山に登る其煙常に立上る故に其鏡は
めされて第一此松の下にて女を失ひ給ふ宮中にの煙あり
延暦二十四年既に立て焼たる天狗といふ事も書し
ある人へる神の再興ある へ此山の何れにかあるや
峯は八葉にわかれて根は四州にまたがる
冨士山は八の峯八の谷ありて其形は八葉の蓮花に似たれば
芙蓉峯と名づくる南西は駿河東北は相州北西は甲州
東南は伊豆州にまたがるときこゆ

道路は三口より登る其道は東西に長くして
南北につまる
甲州より登るは吉田口といひ須走口といひ
相州より登るは須走口とす各浅間の社あり坊舎御師
ありて北の吉田口に登山の大宮口を村山とす
多くて山路東西に長し
形削るが如く高きこと北斗に到る頂は雲に聳え
直立るが如くして
都良香記曰峯如削成直聳属天其高不可測
絶頂まで九里余直立の高さはつもりて都て一千五百丈
として北斗に到るとや
山頂は海より山をいはゞ高く雲をしのぎて

ふ士名山と称して義楚六帖にも見へたり
其の書記曰頂上有平地廣一許里其頂中央窪ミ下體
如炊甑甑底有神池池中有大石石體驚奇宛如鎮席
又曰其頂上匝池生竹青紺葉悽云 鳴沢の沈砂は今
洞の底といふ義楚六帖は後周明教大師の集撰する
書なりこれに曰有山名富士亦名蓬莱其山峻三面是
海中一朶上聳頂有火煙日中上有諸寶流下夜即
却上常聞音樂徐福止此謂蓬莱至今子孫皆
曰秦氏 云々
日本武尊ハ東夷御征伐の時草薙の名御得られたり 右大将頼朝ハ
すそのにて御狩ありて牧狩給へり
日本書紀曰景行天皇四十年夏六月東夷多叛邊境
騒動天皇持斧鉞以授日本武尊冬十月壬子朔癸丑日
本武尊發路之戊午枉道拜伊勢神宮仍辭于倭姫命
曰今被天皇之命而東征將誅諸叛者故辭之於是倭姫
命取草薙劒授日本武尊曰慎之莫怠也是歳日本
武尊初至駿河其處賊陽従之欺曰此野也麋鹿甚多
氣如朝霧足如茂林臨而應狩日本武尊信其言入野
中而覓獸賊有殺王之情放火燒其野王知被欺則以
燧出火之向燒而得免王曰殆被欺則悉焚其賊衆而
滅之故號其處曰燒津一云王所佩劒藂雲自抽之薙
攘王之傍草因是得免故号其劒曰草薙也燒津村ハ
府中の南二里海濱にあり
扨吾妻鏡曰建久四年五月到富士野有巻狩是頼朝

御裁許の處ハ難しと云ふ所なり

明浄の池ハ浄蔵の池名なり

是則ち世に云ふ五條の住人なれハ此道の苦行して浄とか
されハ此の明浄ハ此のあたりにてみたらしの人と云
蜜れなきハ只みしき此所ハ遺跡なりん御座し是ほとの
事もあれハ申し昔ひとより参り奉る事にて云ふ明浄ハ
不二の峯に行き我氏の行ふ昔ハ御池ありて此所刻し種々して
附し雪のまゝの有けるか明浄にて此の種を為し遷世池も
埋ま在し洞にあり世にも知られて云ふしたとなく

人穴の奥ハ仁田か云る所なりける也

将軍家頼家建仁三年六月使和田平太胤長ヲ入伊豆
伊東崎ノ洞ニ使ニ仁田四郎忠常ヲ入冨士ノ人穴ニ云忠常従
者五人洞の中に入りて一晝夜経て後穴を出て穴のうち
あまり狭くして路細く見らし其暗の後水冷しく
後ろへ入りて数千里行き路の足を取られし蝙蝠頭面に
飛び来り其方の数何も限りなし大河有り流れ早くして
岸に鬼ども見え後ろに従者皆死して只一人帰り
冷さりけるしとて見れハ此の人穴ハ足柄山の林麓
ふりしける

十郎の宮五郎の社

曽我兄弟の旧跡ハ大磯山下の中村山中に在りと見ゆ十郎祐成
と云ひ弟五郎時致と云ふ伊東祐親か孫にて父河津三郎
嗣ハ祐親ハ長男の子とハいへと相模ハ河津の子
祐継をもって家督を継しむ祐親怒して是をうらむ祐経

卒せしの後舎弟の別当にたのみて祐継か子祐
経時に九歳祐継遺言して祐親を後見として家督を譲り
祐経の補とせしむ祐継卒せしかハ祐親家督を押領して
みし祐経や成長するに及て父の譲を以て祐経いかりて然に
令江小藤太八幡三郎と相計て祐親を狙ハしむ奥野にて
猟するとき近江八幡赤沢山の麓にて埋伏して射るに其矢祐親か
長子祐泰にあたりて死せり其子祐成時致建久四年夏頼朝公
富士野の狩に天下の士皆扈従する時に及て祐経を狙ひ
投文して寝室へ入て斬ころして又御處に思寄て捕へらる
大雖已に敵ハぬとて共に小舎人五郎丸にからめとられて共に安否信光
を十番切と云兄弟遂に死して其旧跡曽我社ありて又酒匂川の東
小八幡より中町へ入る曽我中村と云富士裾と云富士十郎

原宗村にて曽我八幡並に兄弟の霊ハ久保村禅宮にまつる
墓碑ハ五輪にして文字なし兄弟墓前の古樹ハ虎御前か供養に
植置し卒塔婆の根つきしものゝ桜の樹成る時ハ伊東家の
紋茶筋あらハると云曽我八幡ハ印兄弟の霊倉之土人八幡と
称して今も敬神の事の修行を奉ると云

西行ハ五文字はすへてけり

月苅藻集之人語云西行か詠すと云

題しらず不二の煙の空にきえて行末もしらぬ我思かな

此歌ハ新古今にありて題しらずとあり新古今の続後撰

しきハ富士の嶺を作歌なりといひ又ハ続後撰文ハ富

士ハ日本の鎮護なれハ諸国といふへからす風の心ともあるま

ふきふしたるを西行とおもひて五七五つけ置る也

趣的汀子宗匠にさへ謗られて世々の宗匠をほうりしおゝめくしていく
はつかしき而風情にもあらし仰にあらくのさまにもの言る
詞にゆきて蕉風成たる年より此のさまになにおもむきて中
されはそれて道のおもしこゝにしるしけるにしたか芭蕉翁の
甲斐にゐまし上方江戸両都に在て十二三ヶ所芭蕉翁
の門に移向有かハ杉山白水の弟子門人等其うちにも中牧
国志子両都の此まゝのあかりなり道の中之いふ人もありなん

探幽ハ墨をもてあらはせし絵ハ古今の名筆二流にかよひ一幅ハ細布
怖まうく一尺八寸のものをとゞむ
古今集萬葉序に山の娘に是て人の源にて又今も
かくの如き姫と名たる二流にふ者ありし事中に
其ほとにつれ京四芳京にてゆま

見るやいなや見るに此富士の根の絵にはかなくも心地して
いまよりいて紀行傳
角ふかくよきも果なく不二の根の姿の東のみ見えけるかなしん
雲ハ細布に書て云く梅が香ハ不二の根をみなし雲をなして晴天の
て霜もさも此ほどになり其雲をおほく古よりの風雅をとさや
まなく人皆これは此のあさ様にあらへしさればこの雲をみさり
ては雑風の姿をとりて古法眼の名残の筆墨ハ御らんしさればハ
探幽も書にまの是は不いかに不わかるへし

富士の人ハ廣野村にて此国の人々ハ小袖の白をきて
て此東紀州上山の様よりハ流来と聞中にても只白衣山
とふかさに此まゝ者共ハ中道まて此まて頂にかくる事を得
新参者ハ頂にのぼる者を始として今の世に至るまで毎年六月ハ禊信

俗絶頂よりの眺望に[illegible]云事なり[illegible]
麓の方の松原ハ只古郷のことし 彼豫朝を按するに宝劔ハ[illegible]の宝
劔[illegible] 宝劔ハ[illegible] 紀事曰 始所登之坂路
之外別有沙石之路 毎時下ル者此坂ニ 行人脚底着ニ鞋 縦横
二足ニ不レ如此足痛不レ堪之 然棄沙石ニ下ル 八九里ノ間二時許
至林麓 云云

絶頂の鷄半腹の雀

都良香記曰 亦其頂上匝池 池生竹青紺柔愞 紀事曰 絶頂
有池 其周二里餘 是鳴澤の事 又山頂に湖水[illegible]
和漢三才図会云 富士山ノ麓河河之交 多有鯀 人以爲山
神ノ所ロ愛故 謂富士人 或ハ寅ノ歳生ルル人不レ云可レ食鯀ヲ者 愚
昧惑説也 蓋頂上の湖も[illegible]へし 按するに雀ハ山中

にハ居らさるにや 日光山中にハ[illegible]前にハ居る 故に
[illegible]の中[illegible]の雀[illegible]
[illegible]ハ大心(オホコハロ)[illegible] 伊豫の松山[illegible]の眼[illegible]ハ膝
病[illegible] 故の[illegible]

伊豫の國松山にも又四別の高山ありて富士と相[illegible]
富士ニ[illegible]ハ[illegible] 一峯[illegible] 松山[illegible]
他山の[illegible]ハ[illegible] 之[illegible]
云右兵衛佐殿謀叛の[illegible] 福原にハ公卿
[illegible]今一日も[illegible]
大将軍にハ小松権亮少将維盛 副将軍にハ薩摩守忠度
侍大将にハ上総守忠清[illegible] 都合三万[illegible]
[illegible]四年九月十八日新都[illegible] 副て[illegible]

前陣ハ蒲原富士川に進ミ後陣ハいまた手越宇津の谷ニ有
去ル程ニ同二十四日の卯の刻富士川にて源氏矢合とて定めける
其夜の夜半ばかり富士の沼に群居たりける水鳥とも
何にかは驚きけん一度にはつと立ける羽音の雷大風の如く
の様に聞えければ平家の兵とも源氏の大勢向ひたるは不思議の様
なるに擱さへ廻りけらん敵何十万騎かあらん取こめられてハ
叶ふましとて我先にと落行ける 二十四日卯の刻に源氏
二十万騎富士川に押寄て天も響き大地も動く程に関を
三度作りたる平家の方にハ音もせす人遣して見せけれハ皆
落て行けりと云々 此よりそ始まるへし

不二海若 不盡 伏不二 其英 二三茎 栗精 松榛木の類ひ
和漢三才図会ニ曰 駿河の国 英茎 水香 薫類の庭 富士の芦の葉
山より出る川を云 但芦ハ谷川より出るにハ芝川のり不二の
嶺より落る事にて不二の海苔也とも云 甚た美味也 そこの国
芦茎ハ海より出るもの不二の芦茎と名つけて 其葉ハ安倍
郡にて海苔の様なる所より出て京へ贈りて 如今後に出る事多く云 美也
其茎も又不二より出る物の形 後京にも送りけるへし 松ハ不二
松といふ ひの木の都にも流行の松と見えける

往還ハ行の下越 根東越 関ハ足柄の関 横走の関
此の高き山ハ山頂の形 張女の如し 伝へ聞て張り出ると云ハ
さうして不二もの高嶺の東海道之清見か関より富士の裾野を通り
足柄山を経て箱根山へ入る道 此辺に横走の関 足柄の関
何れ 兼好家集
横はしりの関の辺にて

今も猶此所にて甲州の往還ありて新拾遺集に載る
哉
[illegible]の山路の月を[illegible]ゆくあれハ[illegible]
同集 [illegible]兼直
[illegible]つる雲の[illegible]の関
[illegible]の[illegible]ハ[illegible]より足柄越の[illegible]ハ
[illegible]の西[illegible]より甲州八代郡の北へ越ゆる路也
荒井の[illegible]の山越[illegible]三保[illegible]の
[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
甲州の[illegible]ハ[illegible]の[illegible]ハ[illegible]べし

芝[illegible]の[illegible]深[illegible]
荒井の[illegible]より[illegible]
珀石天雪白々雲間走卒兒童亦仰顔東海初遊
多少客富山ハ不敢問何山
小夜の山西の[illegible]新坂[illegible]中山[illegible]ハ金谷
坂の[illegible]の方[illegible]山の[illegible]の方に[illegible]倉の[illegible]
大井川の[illegible]
[illegible]
三保の松原ハ[illegible]二里西より東へさし出[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]ハ今の[illegible]の[illegible]集[illegible]
[illegible]

よまれたるうたの箱根にて読たる関にすゝむ月影

箱根富士見平ハ之より海を[?]東武を行ば西北

富士山之裾の松原を[?]て東に行ば高[?]

箱根山中にしてみれハ[?]かる富士の高さ

和漢[?]図会[?]接る格別なる景なり天下に[?]

中国の海西及ひ[?]州之州周にして[?]ハ富士山[?]

[?]人之[?]通[?]気江戸日本橋東[?]の[?]

海道の眺望[?]此山の[?]

此山の後ハ尾州富士見原甲州海道[?]坂[?]山のか[?]

之保[?]原より[?]東[?]

西にして[?]鮮[?]山跡東西[?]

箱根より八ケ所の[?]通[?]北の方へ

甚近くたとへ戎[?]より八西南に行[?]

名所図会云富士山の[?]湖[?]

湖[?]鮮[?]程廿五里[?]

[?]の海や湖の[?]

甲州河内筋より甲府に[?]山[?]

して明画の[?]信濃に云富士ハ八ケ嶽より[?]

東[?]人之文風[?]南天竺[?]玉芙蓉と奥[?]

何[?]の句[?]鮮山の[?]出[?]

昔より詩歌連俳の句数今[?]

ま[?]比せむ[?]古今の[?]只[?]

[?]ハ[?]山に対し[?]

富嶽の新歌山[?]人望不尽山歌

田子の浦にうち出てみれば白妙の富士の高ねに雪はふりつゝ

新古今集冬の部 赤人

田子の浦ゆうち出て見れば真白にぞ不盡の高根に雪は降ける

この心ハ所謂田子の浦の景なるを見て眺望殊

なくして心詞に及ぶ物は富士の高根の雪は又心に入るを

吟味すへし 海邊の景いかなる時にも見るへき也 詞にも出る

うくして其余の人々も気色つゝまれて其心ハ詠む

とる修情ほとり南辺の理にすへし

所謂海邊にハ此山の高ハ右にふりつゝみて見るに、此

又見ても見る心ハおのつから新古今にも

ある此歌を入る迄と物語にも見えたると古歌にも

ちる事ハ物にまつれる事也 叢書は同海にも

なくして一山の高根なるを心と詞の玉の緒にかけ來年ハ

萬葉集の赤人ときよしみえたるを 歌人の編集ハ古今にゆつる

及ぶへし

吾翁萬里古路の旬一生にしるしとや東路に頼く人の行なき

うき旅の緒に心ひかれ暮らし 又東路に旅ゆく人ハ此句

かくれ萬古の思ひなして一生の旅も恋ふ 此事にきこゆへし

吾翁ハ芭蕉翁にいふへし 此事緒にて持

意義するにへし

評に曰 此歌都良香萬里山記にも見え 其景にはて

此翁の海道諸国を巡る 吉田道にて此の松原にきき

はやくうき旅にて眺めしその一ところハ見るらんや

西行の五十にも見え いかなる物語にも見えしや

新の方へのうこといふことき粉草花の色かをりあるにや

甚爲細して新ゝ成りのまゝせかうしめんは何を解すへき端多

多き細にて解て辞細えらえさらのやうなし芭蕉翁の

俳の職のさき所と一事に優艶にて就すへし此職の

言ゝまはかくれは先風雅あるか企及すへくきる所と此れ

まを此職の粉骨庵人のなくへきにかゝれは

風俗文選通釋巻之六終